魔力ゼロの無能令息のはずが氷狼騎士団長に執着溺愛されて逃げられません

人物紹介 Characters



Alan アラン

エリスの前世。ベリンガム王国の第三王子。王国の騎士団長を務めていたが、二十五歳のときに戦で命を落とした。



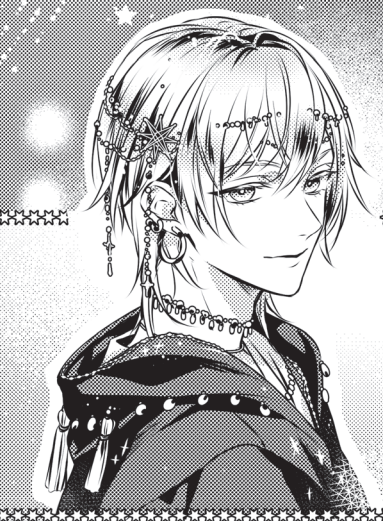
Liam リアム

エリスの乳兄弟で従者。冷遇されているエリスの数少ない味方。



Mark マーク

レヴィの乳兄弟で側近を務めている。切れ者。



Alil アリル

月の神。ヴァンダービルト公爵家に呪いをかけた張本人。



「アラン様は僕の心の中で
ずっと生きている。だから、
きみと夫夫らしい結婚生活を
送ることは絶対にない」

「レヴィの好きな奴って
前世の俺？
待て待て……本当に俺なのか!?」

Levi レヴィ

ベリンガム王国のヴァンダービルト公爵家当主。王国の騎士団長を務めている。ヴァンダービルト家にかけられた呪いの対抗策として、“癒やしの魔力”を持つラムズデール公爵家の人間を迎え入れた。エリスの前世・アランのことを熱烈に愛しているため、最初はエリスに興味がなかったが――？

Elis エリス

アイルズベリー王国のラムズデール公爵家次男。“癒やしの魔力”を持つ一族に生まれたにもかかわらず魔力ゼロのため、家族に冷遇されていた。自分の前世が隣国ベリンガム王国の第三王子アランだったことを思い出した矢先に、前世で弟のようにかわいがっていたレヴィのもとへ嫁ぐことになる。

プロローグ

「レヴィ、おまえの結婚相手だが、明日にはこの屋敷に到着するそうだ」
乳兄弟であり側近のマークが執務室に入るなり告げた。二人だけのときは子どもの頃と同じように敬語は使わないというのは、僕が決めたルールだ。
「へえ。魔法を使っていないのに、ずいぶんと早いね」
貴族の移動はただでさえ大がかりだ。それなのに、冠婚葬祭に関しては、伝統を重んじて魔法を使わずに人力で移動するという昔からのしきたりがある。
これは何もベリンガム王国に限ったことではない。信じられないことに、大陸のどの国でも共通の慣例なのである。
合理的でないことを伝統という言葉で片付けてしまうなんて、理解に苦しむ。まったく、貴族というのはなんて窮屈な生き物なんだろうか。
「そうだな、きっと天気に恵まれていたせいだろうな」
それだけしか言わなかったが、マークはまだ何か言いたげな様子だ。
「何？」

言いたいことがあるなら言えと視線だけで告げると、ためらいがちに口を開く。
「気持ちはわかる。だがあの家の魔力を借りなければ、この先おまえ自身がどうなるかわからない。だから――」
わかっている。結婚が決まってから耳にタコができるほど聞かされてきたことだ。右手を上げて制すると、マークは口をつぐんだ。
「心配するな。大丈夫、うまくやるさ。たとえ気持ちはなくても大切にするよ。彼には協力してもらわないと困るからね」
「……そうか」
「ベリンガムの国民が、安心して幸せに暮らせるような国を作る――あの方に託された使命を果たすまでは絶対に死ねないし、そのためならなんだってするつもりだ」
愛以外なら、なんでも与えてやれる。そもそも政略結婚なので、向こうもこちらに愛情など求めてはいないだろうけれど。
（まあ、仮に気持ちを向けられたとしても、僕が応えることは絶対にない）
壁に飾られた大きな肖像画に目を向ける。
（アラン様が亡くなられて、もう二十年も経つのか……）
時間というものは悲しいほどあっという間に過ぎていく。目を閉じればアラン様と過ごした日々が、昨日のことのように思い出されるというのに。
肖像画を眺めながらアラン様のことを思い出していると、マークがため息を吐いた。いつまでも過去に囚われている僕のことを案じているのだ。けれど、どれだけ時間が経っても想いが色褪せることはない。
「なあレヴィ。俺は思うんだが、もし――」
口を開きかけたマークを制するように、右手を上げる。
「マーク、何度言われても同じさ。気持ちは変わらない。僕が生涯で愛するのはアラン・ベリンガム様、ただお一人なんだ」

第一章　無能令息と最強王子

瞼の裏に光を感じて意識が覚醒する。ゆっくり目を開けると、視界には見慣れない天井が広がっていた。

「どこだ、ここは」

こんなにボロくて汚い天井は、戦場の天幕以外で見たことがない。起き上がると後頭部に激痛が走った。

「っ！　痛ってえ……」

どうやら俺はけがをしているらしい。痛みを強く感じる場所にそっと手を当ててみると、包帯が巻かれていた。

少し力を入れて触れたり、頭を強めに動かしたりすると鋭い痛みが走る。だが命に別状はないだろう。数えきれないほど戦場に出た経験から、これくらいは簡単にわかる。

「それにしても、ここはどこなんだ？」

耳を澄ませても、物音一つ聞こえない。使用人の部屋かと思うほど狭く簡素な室内には、使い古された机と椅子があるだけで、他に家具らしいものは見当たらなかった。

まさか敵に捕らえられでもしたのだろうか。

（いや、ありえないな。俺に限ってそんなこと）

物音を立てないようにそっと起き上がって部屋を出てみる。すると、こちらに向かって歩いてきた若い男と目が合った。

「エリス様！　よかった!!　お目覚めになられたのですね」

彼は茶色い髪を揺らしながら駆け寄ってくる。緑色の瞳には安堵の色が浮かんでいた。

「プリシラ様をお助けになられたのは素晴らしい行動でした。ですが一歩間違えば、エリス様が亡くなられていたかもしれないのですよ！　そうなったらわた、わたしは……」

「おい！　泣くなよ。ほら、こっち来い」

俺は今出たばかりの粗末な部屋の中へ彼を引き入れる。大の男があられもなく涙する姿なんて、誰にも見られたくないだろうと思ったからだ。俺だったら泣いているところを誰かに見られるなんて耐えられない。

部屋の中からよれよれの、だが清潔そうなハンカチを見つけ出して涙を拭いてやる。

「男が簡単に涙を見せるもんじゃないぞ。周りが心配するし、泣いているところなんて見られたくないだろ」

だが青年は何も言わず、呆けたような表情で俺を凝視している。

「エ、エリス様？　どうなさったのです？　はっ！　もしかして打ちどころが悪かったのでは!?」

「失礼な奴だな、俺は正気だ。それにさっきからエリスって誰の――」

そこまで口にして、言葉が止まる。壁際に立て掛けられた古ぼけた鏡に映っているのは、ピンク

ベージュの髪に蜂蜜色の大きな目をした若い男だ。
髪の色も目の色も顔立ちも、すべて俺の知る自分ではない。それなのに、この男は俺自身で間違いないと、心の奥で知っている。
（いやでも俺は――俺の名前は――）
次の瞬間、頭が割れるように痛み出す。立っていることもままならず、その場に蹲った。
「エリス様、どうなさったのです!?　大丈夫ですか!?」
青年が焦った声で騒ぎ立てる。
「うる、せ……しずかに……しろ……っ」
直後、脳内に誰かの記憶が濁流のように流れ込んできた。その記憶はものすごい速度で脳内再生されていく。
（そうだ、これは――俺の、今世の記憶だ）
痛みが治まるとともに、頭の中が整理されて心も落ち着いていく。同時に、自分が階段から落下した妹を助けようとして頭を打ったことも思い出した。
「ああ……そうか俺、生まれ変わったんだな……」

前世の俺は大国ベリンガム王国の第三王子として生まれた。名前はアラン・ベリンガム。王国最強の魔力を持つと言われていた王子で、騎士団長を務めていた。
ベリンガムの騎士団は大陸でもっとも恐れられており、王家の紋章である氷狼にちなんで、氷狼騎士団という異名で呼ばれていた。そして二十五歳の夏。俺はある国との戦いで命を落としたのである。
そうして今。どうやら俺は母国ベリンガムと国境を接する、アイルズベリー王国のラムズデール公爵家の次男、エリスとして生まれ変わったようだった。
（ラムズデール公爵家って、〝あの力〟を持つ一族だよな）
アイルズベリー王国は面積が小さく、国力でいえばベリンガムとは比較にならない。しかし、ラムズデール家の名は大陸中に知れ渡っていた。
その理由はラムズデール家が持つ〝癒やしの魔力〟だ。癒やしの魔力はさまざまなけがや病気を治癒でき、呪いをも解除できる聖なる力である。
この世界では、どの国の王侯貴族も何かしらの魔力を持っているのだが、癒やしの魔力を持つ者はアイルズベリー王国のラムズデール家と、ギルドフォード帝国のグレイ伯爵家にしか生まれないと言われている。
そのためラムズデール家は国内外でも優遇されていて、エリスの両親はその特権をフル活用して贅沢三昧の日々を送っているのだ。
俺――エリスも両親に愛され、何不自由なく育てられた。十五歳のときに魔力ゼロという判定を下されるまでは。
この大陸ではどの国も、魔力が安定してくる十五歳になると、各国の魔法省の神官による魔力判定を受けることが義務付けられている。

十五歳の誕生日の翌日、俺へ下された判定は「魔力量はほぼゼロに等しい」というものだった。
それを聞いた父上は顔面蒼白になり、母上は悲鳴を上げたあと、失神した。
その結果、俺は生まれたときから使っていた部屋を追い出され、使用人たちが暮らす棟へと寝室を移されたのだ。
それだけではない。使用人として毎日働くように命じられた。身に着けていた服やアクセサリーはすべて没収され、代わりに使用人に支給される普段着と寝巻が一着ずつ与えられた。
食事は毎食、粗末なスープと硬いパンだけで、日によってはスープすらもらえない。以前と変わらず接してくれるのは乳兄弟のリアムと、その母で俺の乳母だったジュリア、そして年の離れた妹のプリシラと彼女の乳母のマーサだけ。
なんの説明もなく生活が一変した俺は、しばらくの間ひどく混乱していた。何かの間違いだ、両親が自分にこんな仕打ちをするはずがない。そう思っていたから。
ところがある日、その思いは無残にも打ち砕かれることになる。ひどい暮らしに耐えきれなくなった俺は、夜会に出かける両親と兄へ、どうしてこんな目に遭わなければならないのかと縋ったのだ。
けれど両親は眉を顰め、汚らしいゴミでも見るかのような冷たい瞳で俺を見下ろして言い放った。
「おまえのような無能は、わたしの息子ではない。目障りだ、失せろ」
父上の言葉に頭を鈍器で殴られたような衝撃を受けた。父上の隣に立つ母上は、さらに厳しい言葉を俺に浴びせた。
「わたくしから魔力ゼロの子どもが生まれるなんて、ありえないわ。きっと誰かが赤ん坊のときに取り違えたのよ。無能なおまえを追い出さずに置いてあげているのだから、せめて使用人として役に立ってちょうだい」
少し前まで一緒に遊んでいた兄も、軽蔑しきった眼差しを俺に向けていた。
「おまえのような無能が僕の弟のはずがない」
泣き崩れる俺に見向きもせず、着飾った両親と兄は華やかな馬車に乗って出かけていった。彼らは一度も俺を振り返ることはなかった。
（思い出すだけで胸糞悪い……本当に、今回の両親は信じられないぐらい最低だぜ）
頭痛で蹲った俺を心配したリアムによって、今は再びベッドの中で横になっている。とはいえ眼気は一切ないので、寝転がったままこれまでの人生をあれこれと振り返っていたのだ。
もっと早く記憶が戻っていたら、こんな目には遭わなかったかもしれない。
（だってこんなに魔力が満ちている。もしかしたらこの魔力量は前世の俺以上かもしれないのに）
右の手のひらにほんの少し意識を集中させるだけで、手全体がぼうっと薄桃色の光に覆われる。
戦場ならこれだけで何十人もの傷を一度に治すことができるのではないだろうか。
（判定した神官がゴミだったんだな。できの悪い奴がたまにいるって話は聞いたことがあったが、めちゃくちゃ迷惑だぜ）
あまり優秀でない神官の中には、ごくまれに魔力量の判定を誤る者がいると聞いたことがある。
特に魔力量が膨大すぎると神官の能力によっては測定することができず、「測定不能」という結

果になることがあるらしい。
おそらく俺の魔力を測った神官は、「測定不能」をゼロと判断したのだろう。そしてエリスはショックのあまり、無意識のうちに魔力を自分の中に閉じ込めてしまっていたようだ。
（いやでも、逆によかったのかもしれないな）
こんなにも強大な魔力を保持していることがバレたら、エリスの自由は今と違う形で奪われていたかもしれない。
（これだけ魔力があったら、家どころか国が放っておかないはずだ。バレる前に国外に出られるのはラッキーかもしれないな）
俺は三日後、結婚相手であるベリンガム王国のレヴィ・ヴァンダービルト公爵のもとへ向かうことになっている。あの両親のことだ、けがをしたところで日程を遅らせるなんてことは、絶対にしてくれないだろう。
ベリンガム王国は他国民の出入国を厳しく制限しているため、国外には情報があまり伝わってこない。そのうえ軍事大国でもあるので、近隣諸国からは得体の知れない国として恐れられている。だからこそ両親は迷うことなく俺を差し出すと決めたのだろう。
「ま、別に俺はいいけど。勝手知ったる懐かしの母国だしな」
まさかアイツの嫁として帰国することになるとは思わなかったけれど。
（あの泣き虫坊主が氷狼を引き継いでくれているなんて、感慨深いなあ）
前世で最後に覚えている光景は、レヴィの泣き顔だった。年齢は違うけれど、俺が頭を打ったときのプリシラの泣き顔と重なる気がする。
（もしかして記憶が戻るきっかけは、アイツらの泣き顔だったのかもしれねえ）
結婚相手というのはちょっと複雑だが、成長した昔の弟子と再会できると思うとワクワクしてくる。
だが今の俺はレヴィから見たら、なんの関わりもない隣国の公爵令息。生まれ変わったなんて言っても信じてくれないだろう。
とりあえず正体は黙っておくことにする。それに明るくて人懐っこいレヴィのことだ、政略結婚とはいえきっと大切にしてくれるだろう。
（ベリンガムにまた戻れるなんて僥倖だな。二十年ぶりだし、昔よりいい国になっているといいなあ）
目を閉じてベリンガムの澄んだ青空を思い浮かべていると、ドアが控えめにノックされた。
「誰だ？　入っていいぞ」
声をかけるとリアムがひょっこり顔を出す。眉は八の字に下がり、今にも泣きそうな顔をしている。
「今度は何があった」
「あの……旦那様と奥様がお呼びです」
「俺が目覚めたと伝えたのか？」
「いえ……。ですがその、まだ意識が戻っていないようであれば、叩いてでも起こして連れてきなさいと……」
最後は気まずそうに目を逸らしながら声が小さくなっていく。その様子に苦笑してしまう。

「リアム、気にしなくていい。あの人たちに何を言われたとしても、俺はもう気にしない。行くぞ」
「は、はいっ！」
まるで子犬のように後を追ってくるリアムを従えて、俺は両親の部屋へ向かった。

「旦那様、奥様。参りました」
魔力ゼロの判定をくらって以来、俺にはこの人たちを父や母と呼ぶ権利はない。
「入りなさい」
尊大な父の声を合図に中へ足を踏み入れ、二人の前で片膝をつく。豪華すぎるソファに、やはりゴテゴテに着飾った今世の両親――ラムズデール公爵と夫人が座っていた。
（相変わらずド派手な人たちだな。つーか悪趣味）
両親はいつもと変わらない見下した目を俺に向けている。
「プリシラを助けてくれたそうだな。礼を言う。役立たずのおまえにしては素晴らしい働きだぞ」
「……ありがとうございます」
いちいち傷ついていた父の言葉も、今の俺にはまったく響かない。しっかりと顔を上げて愛想笑いで応じると、父は不愉快そうに眉を顰めた。すかさず隣に座る母が意地悪く微笑む。
「目覚めてくれてよかったわ。ヴァンダービルト家からは一日でも早く来てほしいと言われているんですもの。けがを理由に出発を延期したいなんて言われたら、どうしようかと思っていたのよ」
父も隣で頷いている。

この大陸では、王侯貴族の場合、男性同士でも結婚が可能である。なぜなら魔力があれば「星誓（せいせん）の夜（よる）」と呼ばれる特別な儀式を行うことで、同性間で子どもを産むことができるからだ。
「あの国のことはよく知らんが、ヴァンダービルト公爵は、恐ろしく冷酷で残忍な騎士団長という噂だ。そんなところに可愛い息子や娘を送るわけにはいかない。おまえが適任だというわけだ。何があっても逃げようなんて考えるなよ？　そのときは生かしておけん」
俺と同じ色の瞳はどこまでも冷たい。もし俺が本当に無能だったら、使い物にならないとわかった時点でヴァンダービルト家でどんな末路を辿るかなんて、想像するまでもない。
だというのに、この人たちは俺が向こうで切り捨てられるかもしれないことなど、露ほども案じていない。たとえ殺されたとしてもいいと思っているのだろう。無能を嫁がせたとなれば、ヴァンダービルト家の怒りの矛先が自分たちに向くことさえ、彼らの足りない頭では理解できないらしい。おまえらなんかには負けないという意思を込めて、母に微笑み返した。
「そのようなこと、思ってもみませんでした。何があっても逃げ出すなんて真似はいたしませんよ。ですから旦那様、奥様。どうかご心配なく。三日後には予定通り、この屋敷から出ていきますので」
母は片眉を上げて鼻を鳴らした。
「あら、そう。安心したわ。無能なおまえが家の役に立つことができるんだもの。一生に一度の機会よ。喜びなさい」
「そうですね。嬉しいです」
（マジでクソババアだな……いつか目に物見せてやる）

繰り返される嫌味攻撃に少しイラついてきた。できるなら今すぐ魔力を見せつけてやりたいところだが、測定不能なほど強大な力を持っていると知られたくはない。

心の中で中指を立てても、笑顔は崩さない。そのあとも延々と両親からの嫌味は続き、部屋を出られたのは一時間以上経ってからだった。

使用人の棟まで辿り着くと、リアムが心配そうに声をかけてきた。

「エリス様、大丈夫ですか？　今日は一段と長かったですね。旦那様と奥様は、またひどいことをおっしゃったのでは？」

「大丈夫だ。いろいろ言われたけど全然気にしてねえよ。それより明日からベリンガムに行くまでの三日間は、さすがに何もしなくていいはずだったよな」

「ええ、おっしゃる通りです」

「けがしてラッキーだったぜ」

俺はリアムの肩をポンと叩く。

「おまえも大変だったな。乳兄弟で従者ってだけで、嫌な思いをすることも多かっただろ。ごめんな、俺のせいで」

リアムは目も口も丸くして、叩かれた肩と俺の顔に視線を往復させたあと、大声で叫んだ。

「ほ、本当に、どうなさったのですか!?」

「おまえ、声デカすぎ。いいから入れ」

廊下で騒いでいると目立つし、誰かが両親にチクらないとも限らない。俺はリアムの首根っこを掴むと部屋の中へ引きずり込む。そうして粗末な椅子に座らせると、腕組みをして彼の前に立った。

「いいか。これから三日間、俺にはどうしてもやっておかなきゃいけないことがある。そこでおまえに頼みがあるんだが、聞いてくれるか」

リアムは首がもげそうなほどの勢いで頷いた。

「もちろんです、エリス様！　わたしにできることは、なんでもいたします！」

エリスの魔力は膨大で、持っているのは癒やしの魔力だけではなかった。これらを使いこなすには、知識と技術が必要だ。

前世の知識である程度はなんとかなりそうだが、癒やしの魔力だけはそういうわけにはいかない。この魔力はラムズデール家の相伝であり、魔力を使うために必要な知識を学べる魔導書もこの家にしかないからだ。

そんなわけでベリンガムへ出発するまでの間に、なんとしても力の使い方や知識を習得しておかなければならない。

ラムズデール家に持ち込まれる縁談は、癒やしの魔力を持つ者を一族に迎え入れたいという理由のものがほとんどである。ヴァンダービルト家もきっと同じだ。

それなのにもし魔力を使えないとなれば、婚家でどのように扱われるかわからない。即離婚も考えられるが、最悪なのは殺されてしまうことだ。

いくら俺の前世がベリンガムの王子だといっても、なんの証拠もない状況ではそんなこと誰も信じるわけがない。

（癒やしの魔力を使えるようにならないと、相手がレヴィだってどうなるかわからない。油断はできないぞ）

リアムが人目を忍んで書庫から大量の魔導書を運んできてくれたおかげで、三日間、寝食も忘れてひたすら癒やしの力について学ぶことができた。

自分でいうのもなんだが、もともとセンスのある俺は、すぐにさまざまな治癒魔法を使いこなすことができるようになった。

そして三日後。昼過ぎにヴァンダービルト家からの迎えが到着した。

正門の前に白馬を繋いだ黄金色の大きな馬車が現れたとき、そこにいた誰もがその大きさと美しさに目を奪われた。

ベリンガムは軍事大国であると同時に質のいい鉱山がたくさんある。そのため王侯貴族たちは他国の貴族たちとは比較にならないほど莫大な資産を持っているのだ。

車体には華やかだが上品な彫刻が施され、あちこちに宝石も使われている。中でも美しいブルートパーズを目にはめ込んだ、雄々しい狼の彫刻に目を奪われた。

（この宝石、レヴィの目の色にそっくりだな）

あの泣き虫坊主はどんな大人になったのだろう。早く会ってみたい。後ろを振り返ることもなくリアムを引き連れて馬車に乗り込むと、ヴァンダービルト家の家臣と思しき壮年の男性が近づいてきた。

「エリス様。ご家族の皆様にご挨拶をなさらなくてもよろしいのですか？　これから先は、そう簡単にご実家に帰ることは難しくなりますが」

「ええ、大丈夫ですよ。あいにく家族は全員、風邪をこじらせて寝込んでおりますので」

「ではお見送りは使用人の方々のみということなのですか？」

「はい」

「……荷物も、それで全部なのですか」

「ええ、まあ」

俺の荷物は書庫からくすねた一冊の魔導書と、運よく没収されずにすんだ幼い頃から愛用しているペンとノートだけ。これらを愛用のずだ袋に入れている。

「かしこまりました」

男は驚いたような、困惑したような表情を浮かべていた。というかベリンガム側の者たちは皆、同じような顔になっている。

（まあ、普通は特別な力を持つ公爵令息の嫁入りが、こんなみすぼらしいとは思わないか）

大陸のどの国でも喉から手が出るほど欲しい魔力を持つ家の嫁入りにしては、あまりにすべてがお粗末に見えているのだろう。

衣装と靴だけは昨日の夜、なんの前触れもなく部屋に運ばれてきたので、仕方なく袖を通した。おかげで服装だけはド派手なことになっている。

男が礼をして扉を閉めると、すぐに馬車が動き出す。こうして俺は、引くほどあっさりと二十年

間育ったアイルズベリー王国から出ていくことになったのである。

「すごいですねエリス様！　こんな豪華な馬車、初めて乗りましたよ！」

リアムは感動した様子であたりを見回している。馬車は車内も金色と水色で統一されていた。水色のビロードが張られた座席はふかふかで、たくさんのクッションが置いてある。

そのうえ二階建てのような造りになっており、ベッドも付いている。だがこれくらいはベリンガムの上位貴族の馬車としては標準装備だ。

前世の俺が使っていた馬車は戦場用ということもあって、もっと大きかった。

「アイルズベリーではこんな馬車見ないもんな」

靴を脱ぎ捨て、クッションを枕にして座席にゴロリと寝そべる。

「ちょっ、エリス様！　お行儀が悪いですよ」

「ん？　いいだろ別に。どうせ着くまで誰も入ってきやしねえよ。それよりおまえさ、本当によかったのか」

「何がです？」

リアムは首を傾げる。

「俺と一緒にベリンガムに行くことだよ。もうアイルズベリーには帰ってこられないかもしれないんだぞ。そうなったら、ジュリアにだっていつ会えるかわからない。それ、わかってるのか？」

ジュリアというのは俺の乳母で、リアムの母親である。俺が無能扱いされるようになって以来、

リアムも俺の乳兄弟で従者というだけで、他の使用人たちからバカにされたり嫌がらせをされたりすることもあった。

「俺がベリンガムに嫁いだら、おまえも自由の身になれたのに」

リアムは一瞬きょとんとした表情になったが、すぐに得意げに胸を張る。

「ご心配には及びません。わたしは人生をエリス様に捧げると決めておりますので。地獄の果てまで付いていく所存です。母もそれを望んでおります」

「は？」

「わたしはエリス様には一生かけて恩返しをすると決めているということです」

「恩返し？　おまえにそんな大層なことした覚え、ねえけど」

するとリアムは立ち上がらんばかりの勢いで声を張り上げた。

「子どもの頃、ティータイム用のお菓子を盗み食いしたという疑いをかけられたことがありました。そのときエリス様だけが、わたしの無実を信じて庇ってくださいました。さらに潔白を証明してくれたのです。わたしはあの瞬間に決めました。一生エリス様に付いていこうと！」

リアムはさも感動的な話のように語っているが、正直あきれてしまう。

「たったそれだけで人生決めんなよ。人は誰しも、他人に迷惑かけなきゃ自分が好きなように生きていいんだから」

「それならやっぱりエリス様に付いていきます!!」

「声デカいな……わかったよ、勝手にしろ。けど怖くないのか？　ベリンガム王国って謎に包まれ

てるっていうか、あんまり他国に情報が出てないだろ」
「ええ。事前に少しでも調べようと試みたのですが、有益な情報は得られませんでした。それにご結婚相手のレヴィ・ヴァンダービルト様のお顔を見たことがある方は、他国では一人もいないとか……」
「そうなのか？」
「はい。レヴィ様は公的な場でも戦場でも、常にビロードのマスクをしていらっしゃるそうですよ。噂では大変醜い容貌をされており、それを隠すためだとか」
「いや、それはない。むしろ逆だ」
言ってからハッとする。当然リアムは驚いた顔になった。
「なぜご存じなのですか？」
「い、いや……そんな気がしただけだ。勘だよ、勘！」
「はあ、左様ですか」
訝しげな視線を寄越すリアムの気を逸らすために、食いつきそうな話題を探す。
「そ、そういえばベリンガム王国の名物料理ってどんなんだろうな。楽しみだな！」
食べることが大好きなリアムはすぐに身を乗り出してきた。
「はい！　あいにく食べ物についての情報もまったく出てこなかったので……ですがベリンガムは大国ですから、おいしい名物がたくさんあるのではないでしょうか」
「ああ。きっとうまいものはたくさんある。楽しみにしておけよ」

豊かな土壌を持つベリンガムは食材の宝庫で、王都は特に国中のうまいものが集まっている。唯一、酒だけはあまり質のいいものがないのだが。
それから王都に着くまで、俺たちはくだらないけれど楽しい話をあれこれ繰り広げた。
まさかたった二十年の間に母国が激変しているなんて、予想もしていなかった。

第二章　王国の異変と氷狼騎士団長の秘密

久しぶりの母国の土を踏んだ俺は、その変わりように戸惑いを隠せなかった。
泥水をぶちまけたような曇天のせいか、王都全体が暗く淀んで見える。昔は街や広場を美しく彩っていたはずの草花も枯れ果てている。
（どうなってんだよ……これ）
異様にも思える光景を通り過ぎ、俺たちを乗せた馬車はヴァンダービルト家の屋敷に到着した。
馬車を降りると、揃いの制服を着た使用人たちが左右にずらりと並んでいる。その数はラムズデール家の比ではない。
「すごい数ですね」
背後からリアムが囁く。俺は堂々とした態度に見えるよう、正面をしっかり見据えた。
「ようこそいらっしゃいました、エリス様。わたしはレヴィ様の補佐官を務めておりますマーク・ボイドと申します」
切れ長の金色の目に、ダークブラウンの髪をした青年が恭しく頭を下げる。背が高く細身で、銀縁の眼鏡がいかにも切れ者という印象を与える。
（勘のよさそうな奴だな。いろいろボロが出ないようにしないと）

レヴィとはいつも王宮で会っていたので、彼の家を訪ねたことはない。だから従者は知らない者ばかりだ。
俺はマークに気づかれないよう注意深く彼を観察しながら、貴族らしい訓練された笑みを浮かべて応じる。
「よろしくお願いします、マーク。エリス・ラムズデールです。こちらはわたしの乳兄弟で腹心の友でもある従者のリアム・モンデールです」
マークはにこりともしない。愛想がなさすぎるだろ、と心の中で毒を吐く。
「左様でございますか。では、どうぞこちらに」
マークの後を付いて屋敷の中に入る。長い廊下を歩き、階段を上って辿り着いたのは、白とパステルピンクで彩られたガーリーな部屋だった。
「エリス様にはこちらのお部屋を準備させていただきました。これからレヴィ様にお会いしていただく予定だったのですが、ギルドフォード帝国との国境で小競り合いが起きてしまいまして。お戻りは明日の夜になるそうです」
「そうですか……」
（すぐに会えると思っていたけど、騎士団長だもんな。忙しいよなあ）
「明日の夜といっても、おそらくかなり遅い時間になることが予想されます。お会いしていただくのは明後日の昼頃になるでしょう」
「わかりました。残念ですが、お会いできるのを楽しみに待つことにします」

マークとリアムが戸惑った表情で俺を見ている。
（やべ、顔も明かさない恐怖の騎士団長に会うのを楽しみなんて、どう見ても怪しすぎるじゃん）
「あは、はは……」
かっこ悪すぎる愛想笑いでごまかす。
「……レヴィ様がお戻りになるまでこちらでゆっくりお過ごしくださいませ。夕食はお部屋に運ばせます。お部屋の中にバスルームも付いておりますので、入浴の際は浴室の呼び鈴を鳴らしていただければ、メイドが準備に参ります」
「ありがとうございます」
「リアム様のお部屋もすぐ近くにご用意しておりますので、後ほどメイドに案内させます。では、わたしはこれにて失礼いたします」
マークが姿を消した途端、リアムが部屋の中を飛び回って観察を始める。
「すごいですよエリス様！　こんなに広いお部屋、見たことがありません！」
「おー。すげえな」
リアムは大興奮だが、ベリンガム王国ではめずらしくない。同じ爵位でも、アイルズベリーとは豊かさが桁違いなのだ。
はしゃぐリアムの後をゆっくりと歩き、俺も部屋を確認してみることにする。
居間の左右に、いくつか扉がある。右の最奥が寝室、その隣が書斎、さらにその隣は私的な客を招くための小さめの客間だ。左の最奥はバスルーム、その隣は簡易的なキッチンが設置されている。

どの部屋も白とパステルピンクでまとめられ、装飾には花や星のモチーフがふんだんに使われている。絶世の美少女が住む部屋としては満点だろうが、俺には絶望的に似合わない。
ピンクと白はラムズデール家のシンボルカラーなので、それに合わせたのだろう。だが嫁いでくるのは男だとわかっていたはずだし、もう少しやりようがあったのではないかという気がする。
（ダメだ、落ち着かねえ。もう俺の部屋だし変えたっていいよな？　ま、もし怒られたら元に戻せばいいや）
俺は立ち上がって、部屋の出入り口にあたる大きな両開きの扉の取っ手に触れる。
（やっぱ……あの色しかないだろ）
頭の中でイメージし、目を閉じる。ほんの一瞬で扉は漆黒に変わった。
「よし！　成功だぜ！」
いったん廊下に出て、扉の外側を確認する。こちらも黒にしっかり変化していた。久しぶりに使った魔法がうまくいって嬉しくなる。
「え、エリス様！　い、今っ！　急に扉が真っ黒に変わりましたよっ!!」
そんな俺とは対照的に、リアムが真っ青になって俺に縋りついてきた。
「当たり前だろ、俺がやったんだから」
「えっ!?　エリス様がっ!?　いつの間にこんなことができるようになられたのですか!?」
「うるせえな」
指を鳴らすと大きな棒付きキャンディが俺の手中に現れる。それを見てさらに驚いたのだろう、

大きく開いたリアムの口にキャンディを突っ込む。
「今までは、だよ。いいから黙って見とけ。いいな？」
リアムはキャンディを口に入れたまま、コクコクと頷いた。
外野が大人しくなったところで、床に敷き詰められたパステルピンクの絨毯を真紅に変える。ベッドの天蓋のカーテンも同じ真紅に揃えて、カーテンやソファ、本棚はすべて黒で統一する。赤と黒という、強い印象の組み合わせになったぶん、デザインはシンプルを心がける。
花や星などのモチーフはほぼすべて消して、ポイントとしてゴールドを取り入れていくと、あっという間に前世の自分の部屋によく似た部屋ができあがった。
二十年前のこととはいえ、長年使っていた部屋はある程度思い出せる。調子に乗って暖炉の上に、俺の紋章だった赤い目をした黒虎のタペストリーも掛けてみた。
「うん。我ながらいい部屋になった」
前世の自分の髪と目の色でもある黒と赤は一番好きな色だった。今のピンクベージュと蜂蜜色の組み合わせは、ちょっと弱そうであまり好きじゃない。
「すごいです……！　でも、派手すぎじゃありません？　なんだか落ち着かないです」
リアムはキャンディを舐めながらキョロキョロと部屋を見回している。
「はぁ？　何言ってんだよリアム。どう考えてもこのうえなく落ち着く部屋になっただろ」
「赤と黒って、インパクトが強くて目が疲れる気がします」
「そこがいいんだろ。どっちも俺の一番好きな色だぞ」

「えっ⁉　そうなのですか。存じませんでした」
驚いてばかりのリアムの肩をポンと叩く。
「そういうことだから、この部屋には慣れろ」
やっと落ち着く部屋が完成したことに大満足でベッドに寝そべってみる。
久しぶりに上質なベッドに寝転がったせいだろうか。身体から余計な力が抜けていく。久しぶりの帰還で緊張していたのかもしれない。
いや、今世では初めてまともに魔力を使ったからだろうか。とにかく急に睡魔に襲われ、瞼が重くなっていく。
「悪い、ちょっと寝る。適当な時間になったら起こしてくれ」
その言葉を最後に、俺は意識を失うようにして眠ってしまった。

「……さま、エリス様‼」
「んぁ……なんだよ……うるせえな」
両肩をものすごい勢いで揺すられて目が覚めた。窓の外はすっかり暗くなっている。思った以上に眠ってしまったようだ。
「あ、わり……もしかしてすげえ寝てた？　リアム、もう部屋に戻っていいぞ」
ところがリアムは青い顔で呻く。
「それどころじゃないんです……て、しまいました……」

「は？　なんだって？　聞こえない」
「い、今からレヴィ様とお会いすることになってしまいましたっ!!」
「はぁ!?」
リアムに負けないくらいの大声を張り上げてしまう。
「なんでだよ！　帰ってくんのは明後日だったろ！」
レヴィに会えるのは嬉しいが、まだもう少し先だと思っていたせいで心の準備ができていない。
「それが……緊急事態が起きたとかで、急遽お戻りになったそうです。すぐにでもエリス様にお会いしたいとか。すでにお休みになったとお伝えしたのですが、起こしてほしいとのことでして……」
「旦那様は戦場帰りだろ？　それで至急会いたいってことは、あれか、俺の力が必要になったってことじゃないのか」
「なるほど！　レヴィ様は大けがをされたのかもしれませんね」
「うん」
（大丈夫かよ、レヴィの奴。アイツは昔から負けず嫌いで無鉄砲なところがあるんだよな）
自分より魔力が強くて体格もいい兄弟子に、傷だらけになっても何度も全力でぶつかっていく姿を思い出す。
負けず嫌いは長所でもあるが、戦場では命取りになることもあるのだと何度も諭したものだ。過去に思いを馳せていると、控えめなノック音がして現実に戻される。
「エリス様、お休みになられていたところ申し訳ありません。ご準備のほどはよろしいでしょうか」

返事の代わりにリアムが扉を開ける。本当に突然だったのだろう、マークの髪や服は少し乱れている。
「はい、準備はできています」
とはいうものの、着替えもせずに眠っていたから、起き上がって髪の毛を手ぐしで整えた程度だが。
「エリス様にはこれからレヴィ様のお部屋へ行っていただきます」
「レヴィ様の部屋は近くにあるのですか？」
俺の問いにマークは首を左右に振った。
「この屋敷の中でレヴィ様のお部屋の位置を正確に知っている者はごく限られております。ですので、申し訳ありませんがエリス様には転移魔法でレヴィ様のお部屋に入っていただきます」
（なんだよ、王宮並みに厳重だな）
王侯貴族はさまざまな者から恨みを買うことがある。暗殺者を放たれたり、スパイが潜り込んだりするのは日常茶飯事だ。
特に騎士団関係者は狙われることが多い。おそらくレヴィも暗殺者を警戒し、魔法で部屋の位置を特定できないようにしているのだろう。
「わかりました。転移魔法を使えばいいのですね」
発動しようとすると、マークに止められる。
「エリス様が魔法をお使いになる必要はございません。レヴィ様のお部屋には複雑な結界が張られておりまして……一般的な転移魔法ではなく、専用の魔法陣を使った転移を行わなければならない

のです」
言い終えると、マークは緑色に光る魔法石のついた小さな杖で魔法陣を描きはじめる。
魔法石から金色に輝く粉のようなものが出て、魔法陣を形作っていく。
「さあ、どうぞこちらへ。今後も継続的にレヴィ様との面会の機会が設けられると思いますが、移動の際にはこちらの魔法陣を使用いたします。この上に立てば、自動的にレヴィ様のお部屋に転移されるようになっておりますので」
黒い革手袋をはめたマークの手にエスコートされ、円の中央に立つ。すると、すぐに魔法陣から強い光が放たれる。さらに強風も下から吹き上がってきて、思わず俺は目を閉じた。

光と強風が収まってから目を開けると、景色が一変していた。これがレヴィの寝室なのだろうか。絨毯からベッド、そしてカーテンに至るまで、すべてが黒で統一されている。
静まり返り、最小限の明かりしか灯っていない部屋の中は人の気配が感じられない。
「行き先、間違えたのかな」
首を傾げながら魔法陣の外に足を踏み出した、そのとき。
「間違ってないけど」
「ぎゃっ!!」
突然、すぐ後ろから聞こえた声に驚いてしまう。振り返ると、真っ黒な軍服に身を包んだ十代後半とおぼしき少年が立っていた。

金色の髪とレヴィのようなブルートパーズの瞳が印象的な少年は、恐ろしく整った顔立ちをしている。
(この子、レヴィにそっくりだな)
「ここ、おまえの部屋なのか」
「うん、そうだけど」
少年は真顔で首を縦に振る。
「やっぱり間違ってるじゃねえか。ごめんな。俺、実はこれからヴァンダービルト公爵のところに行かなきゃいけなくて――」
その途端、少年のあきれた声が俺の言葉を遮った。
「だーかーらぁ。話、聞いてた？　間違ってないってば」
少年はわざとらしく肩を竦めてみせる。
「はぁ？　どういうことだよ」
顔はレヴィにそっくりだが、性格は全然違う。素直で可愛いレヴィとは比較にならない態度の悪さにイラっとする。だが少年は構わずしゃべり続ける。
「公爵は僕。ここは僕の部屋。きみ、ラムズデール家から来た僕の結婚相手でしょ」
頭が追いつかない。たしかに顔立ちはレヴィにとてもよく似ている。
だが今の彼の年齢は俺より上だ。きっと彼はレヴィの親戚かなにかで、俺をからかっているのだろう。

「はぁ？　おまえが公爵だって？　んなわけねーだろ。俺は急いでんの。ガキに構ってる暇はねえよ。それより知ってるんなら、公爵のところに連れていってくれよ」
だが少年は肩を竦めるだけだ。
「僕の話、信じてないわけ？」
「当たり前だろ。公爵は三十五歳だぜ。さすがにアイルズベリーにもそれぐらいの情報は流れてる」
「嘘なんかついてないよ。今から証明してあげる」
「どうやって？　変な真似したらガキでも容赦しないからな」
イタズラするなよと釘を刺す。
「変な真似なんかしないって」
何をする気なのだと身構えると、顎にそっと少年の指先が触れる。そしてくい、と持ち上げられた。
「え、ちょ――」
「目、閉じてくれる？」
被せるようにぴしゃりと言われ、反射的に言われた通りにしてしまう。次の瞬間、唇に柔らかく冷たいものが触れ、頭の中が真っ白になった。
（待て……これって……キ、キスじゃないのか）
少年の唇はまだ離れない。混乱と動揺でどのくらい時間が経っているのかもわからない。俺は心の中で叫んだ。
（ちょっと待てよ！　俺、前世も今世もファーストキスなんだが!?）

やがてふっと唇が離れ、俺は混乱したまま勢いよく目を開いた。
「……は？」
さっきまでそこにいた美少年の姿は消えていた。代わりに、彼と同じ金色の髪とブルートパーズの瞳を持つ、信じられないほど整った顔立ちの男が立っている。
（な……何が起きた!?　どういうことだよ！）
驚きすぎて力が抜け、へなへなとその場に座り込む。床に手をついたまま、呆然と男を見上げた。真珠色の肌に、怜悧な印象を与える鋭いフェイスライン。黄金で染めたような艶のある美しい金髪。くっきりとした二重瞼の下には、髪と同じ色の長く濃いまつ毛に縁どられたブルートパーズの瞳が輝いている。
青年は腕組みをすると片眉を上げて俺を見下ろす。
「これで信じてくれた？　ていうかきみ、けっこう口が悪いんだね。僕は細かいことは気にしないから、そのままでいいけど」
驚きのあまり言葉の出ない俺に、彼はわざとらしいほど恭しい礼をして、花のような笑みを浮かべた。
「ようこそベリンガム王国へ。僕がレヴィ・ヴァンダービルトさ」
レヴィが右の人差し指を立てると、指先からオレンジ色の炎の蝶がいくつも生まれ、天井のシャンデリアへと上っていく。
シャンデリアのロウソクにとまった蝶は、すぐに普通の炎へと変化して部屋は明るくなった。

これはかつて俺が、最初にレヴィに教えた火魔法だ。懐かしい気持ちで蝶に見入っていると、声をかけられた。

「どうぞ座って。きみには話しておかなくちゃいけないことが、いろいろあるんだよね」

真っ黒のビロード張りのソファを勧められ、レヴィと向かい合う形で座る。

「え……この部屋……はぁ!?」

明るくなった部屋を見回した俺は、その場で立ち上がって叫んでしまった。

「ねえ、うるさいんだけど」

レヴィはうんざりしたような表情で俺に視線を向けてくる。だがそんなことはどうでもいい。あの壁に掛けられた、どでかい肖像画。いったいなんのつもりだ。

「いやでも、だって、え……あの、あれ……」

震える手で壁に設置されたバカみたいに大きな肖像画を指差す。

「何？　あの絵が気になるの？」

「気になるっていうか、えーと、その……」

見間違いじゃないよな。俺は何度も目を瞬いたりこすったりしてみるが、そこに描かれている人物が変わることはない。だがどうしてこんなものがレヴィの部屋に飾られているんだろうか。

「綺麗な人でしょ。実際はこの肖像画よりもずっともっと綺麗だったんだ。容姿だけじゃなくて、心もね」

「はぁ」

なぜかレヴィは自慢げな顔で俺を見る。それからうっとりとした表情で肖像画に視線を移した。

「この方はね、アラン・ベリンガム様だよ。この国の第三王子で、騎士団の団長を務めていた方なんだ」

やっぱりそうだ。この絵は前世の俺だ。生きている間にこんなにデカい自分の顔と対面する機会はなかったので、なんともいえない気持ちになる。

「アラン様の姿を記憶が鮮やかなうちに残しておきたくて。亡くなられてすぐに描かせたんだ。でも、なかなかアラン様の美しさを表すことは難しくて、完成までに五百十回描き直させたんだよ」

「何やってんだよおまえ!!」

反射的にまたしても大きな声が出てしまう。だが許してほしい。レヴィが俺の死後、こんなバカみたいなことに取り組んでいたなんて、想像もしていなかったのだから。

「だからきみ、うるさいって。それと、僕のことをおまえなんて呼ばないでもらえる？」

レヴィが不愉快そうに眉を顰め、俺はハッとした。

（しまった。つい昔みたいな口を利いちまったけど、今は別人に生まれ変わっているうえに、コイツのほうが年上なんだった）

「すみません。その、あまりに驚きすぎてしまって」

「次からは気をつけてね。僕、そんなに気が長いほうじゃないから。ほら、突っ立ってないで座れば？」

レヴィに促されて再びソファに座る。

「話さないといけないことが多すぎて嫌になっちゃうよ。まず初めに、僕――というかヴァンダービルト家にかけられた呪いについてなんだけど」
ヴァンダービルト家に呪いがあるなんて。そんな話、今まで聞いたことがない。いったいどんな類のものなんだろうか。レヴィの言葉に、俺は背筋を伸ばして小さく頷いた。
「長くなるから、飲み物があったほうがいいかな」
レヴィが指を鳴らすとティーテーブルの上に黒いタンブラーが二つと、やはり黒いお皿にのせられた小さな焼き菓子が現れた。
タンブラーからはキラキラ輝く湯気が立っている。レヴィはテーブルからタンブラーを取って手渡してくる。
「どうぞ。ベリンガムの名物、銀のお茶とフローライトのパイだよ」
「ありがとうございます」
銀のお茶の匂いが懐かしくて、胸いっぱいに吸い込む。多種多様の鉱山に恵まれたベリンガムでは、昔から鉱石を食用に加工する技術が発達している。
銀のお茶とフローライトのパイは、建国の始祖、初代国王であるジェイコブ・ベリンガムが好んだと言われる伝統的な食べ物だ。
ためらうことなく手を伸ばして口に入れると、レヴィは少し驚いた表情になる。
「きみ、変わってるね。国外の人間は鉱石でできた食べ物なんて気味悪がるのに」
（しまった。懐かしさでつい喜んで食べちまった）

「……夕食、食べ損ねてしまったので」
「ああ、そういうこと」
我ながら雑なごまかし方だと思ったが、レヴィは納得してくれたようだった。
「じゃあ本題。さっき、きみとキスするまで、僕は子どもの姿をしてたでしょ」
「はい。やっぱりあのガキ……じゃなくて子どもはレヴィ様だったんですね」
「そう。ヴァンダービルト家を継いだ者にはね、即位と同時にある呪いがかかるんだ。例外なく、すべての者にね。いつから続く呪いなのかは、わからない。もう何百年も続いていることだけは伝わってる。とても古くて強い呪いで、爵位を継いだ年齢の姿のまま歳を取らずに生きていかなければならなくなるんだ」
「つまり、不老不死の呪いということですか」
「うーん。ちょっと違うかな。不老だけど不死じゃない。だから普通に死ぬよ。実際、父上ももう亡くなっているし」
「えっ⁉」
「何に驚いたわけ」
話の腰を折られたレヴィが、明らかにイラついた目でこっちを睨む。
「あ、すみません。その……先代は亡くなられたとおっしゃいましたよね」
「うん、言ったね。手短に話すけど、僕の両親と兄は馬車の事故でいっぺんに命を落としたんだ。僕が十七になったばかりの頃だから、もうずいぶん前の話だけど。だからこの家には、僕以外にヴ

アンダービルト家の血を引く人間はいないよ」
「そうだったんですね」
レヴィの兄、エメット・ヴァンダービルトとは、それなりに交流があった。読書が趣味で穏やかな性格の、信頼のおける男だった。
先代のヴァンダービルト公爵もとても感じのいい人で、公爵夫人も明るくて優しい笑顔が印象的な美人だった。
彼らに会えることも密かに楽しみにしていたのに、まさか三人とも亡くなっていたなんて。ショックで言葉を失う俺を、レヴィが冷たい笑みを浮かべて見ている。
「どうしたの？　家族がいないのがそんなにめずらしい？」
「いえ、そういうわけでは。すみません、話を続けてください」
「この呪いについて知っているのは国王と王宮のごく一部の人々、それからヴァンダービルト家に代々仕えている腹心の一族だけなんだ」
レヴィはそこで言葉を区切ると、銀のお茶を一口飲んだ。
「他の貴族たちはもちろん、国民だって知る由もない」
「でも不老なんですよね。それではすぐに気づかれてしまうのではないですか？」
「それが大丈夫なんだよね。なんでだと思う？」
「わかりません」
即座に答えると、レヴィはバカにしたように鼻を鳴らす。

「少しは頭使ってよね。誰にも気づかれないのはね、ある条件が整えば一時的に実年齢の姿に変化することができるからだよ」
「あ、それで先ほど――」
「そういうこと。ヴァンダービルトにかけられた呪いは、癒やしの力を持つ者との交わりによって一時的に解呪状態になる。だから代々、当主は癒やしの力を持つ一族と結婚してるってわけ。でもこの数百年はアイルズベリーよりも親交が深いギルドフォード帝国のグレイ伯爵家から娶（めと）っていたんだ」
「そうだったのですか」
「ところが僕の代になって、なぜかグレイ伯爵家には十分な魔力量を持つ子どもが生まれてこなくなった。唯一、強い癒やしの力を持った一人息子は跡継ぎだから外には出せない。そこで数百年ぶりにきみの実家に結婚の申し入れをしたわけ。でも、僕の家ときみの家ってまったく交流がなかったでしょ？　断られることも想定していたから、助かったよ。来てくれてありがとう。まあ、けっこうな大金を要求されたのには笑ったけど」
癒やしの魔力を持つ家系といっても、魔力量には個人差がかなりある。父はせいぜいかすり傷を治すくらいの力しかない。兄も同じだ。
昔はそうでもなかったというが、今のラムズデール家では強い癒やしの魔力を持った子どもが生まれることはめったにないらしい。
だが父は神官に大量の賄賂（わいろ）を定期的に渡すことで、ラムズデール家の直系は全員が素晴らしい魔

力を持っているという嘘の宣言をさせていた。
　実際、ほんの少しの癒やしの魔力でも、持たない人々からはありがたがられることのほうが多いらしい。
　だから俺も、対外的には膨大な魔力を持っていることにされていたのだ。
（俺の場合は本当に持ってるから、よかったけど）
　ふと疑問が湧いて、尋ねてみる。
「レヴィ様が爵位を継いだのは、おいくつのときなんですか」
「僕？　十七歳だけど」
「では、今までは……」
「普段は仮面を被っているんだ。だから僕の素顔を知っているのは、呪いについて知っている人間だけだよ」
「ですが、体格も年齢によって変わりますよね」
「たしかに、本来はごまかすのは難しいよ。だけど、僕って実はすごく魔力が強くてさ。これまでのヴァンダービルト公爵の中でも歴代最強って言われてるの。ある程度の期間なら、自力でも本当の姿を保っていられるんだよね」
「すごいですね」
　たしかに幼い頃からレヴィの魔力は強かった。思わず漏れた感嘆に、レヴィは当然とばかりに頷いた。

「まあね。でも、ものすごく魔力を消費するから大変でさ。しかも操作がすごく難しいの。だから昼間、人前に出るときだけ魔力でなんとかして、夜は元の姿に戻してるんだ。でも少し体調が悪かったり気を抜いたりしちゃうと、身体だけは大人のままで、顔だけ十七歳に戻っちゃうことがあるわけ。そんなの誰かに見られたらやばいでしょ。でも癒やしの力と交われば、一ヶ月はこの姿を保てるらしいんだ」
「あの、交わるというのは……もしかして先ほどの……アレ、でしょうか」
　声が尻すぼみになってしまう。言いながらさっきのことを思い出して頬がじわじわと熱を持つ。俺は気づかれないように視線を床に移した。
「ああ、キスのこと？　そう。魔力供給の方法はキスだよ。それ以上のことをすればもっと効果があるらしいんだけど、僕は無理。ていうか純粋ぶらなくてもいいよ。きみのこと、調べはついてるんだからね」
「え？」
　まさか、すでに俺の正体は把握済みということなのだろうか。こんな短期間でそんなことがありえるとは思えない。
　だが昔からベリンガム王国は近隣諸国にたくさんのスパイを潜入させている。ないとは言いきれない。心臓が嫌な音を立て、背筋を冷や汗が一筋、流れていく。動揺を見逃すまいと美しい目が俺を捉えた。
「エリス・ラムズデール。二十歳。ラムズデール公爵家の次男で趣味は恋愛、特技も恋愛。お相手

はカーライル公爵家の次女ハリエット嬢にフォード伯爵夫人、コルレーン子爵夫人、ヘイスティングス男爵家の美人双子たちなどなど。侍女にも手を出したり、いろいろと派手に楽しんでたんでしょ」
「は？」
なんの話だ。というかそれは父と兄のことだと思う。二人ともよく「恋愛こそ最大のエンターテインメントだ」と得意げに語っていたから。
「癒やしの魔力を持つ者は、二つの国の二つの貴族の血にしか生まれない。だからヴァンダービルトはずっと昔から、どちらの家にも隠密を仕込んでるんだよ」
知らなかった。さすが軍事と策謀に長けた大国の貴族はやることが違う。黙っている俺に、レヴィは意地の悪い微笑みを浮かべる。
「全部バレちゃって言葉も出ないみたいだね。でも心配いらないよ。僕、そういうの気にしないから」
「あ、いえ……はい」
証拠もないのに否定しても、信じてもらうのは難しいだろう。俺だって前世では、長年仕えてくれていた隠密たちには全幅の信頼をおいていた。
彼らより潜入先の人間の話を信じるなんてまずありえない。
「それから僕、きみにキス以上のことなんて、するつもりないから」
「はぁ」
「だからもし僕に抱かれることを期待しているなら、悪いけど諦めてね。もう僕には一生を捧げると決めた人がいるんだ」

「え⁉」
レヴィに好きな相手がいることを知って、少しテンションが上がってしまう。誰なんだろう、俺の知っている相手だろうか。途端に怪訝そうな目を向けられてしまった。
「なんでそんなにワクワクした顔してるの。僕たち、今日会ったばっかりだよね？　よく知らない人間の想い人に興味なんてあるわけ？」
「ああ、いや……すみません」
さすがに失礼だったなと謝る。だがレヴィは俺をじろじろ眺めると、急に何かを悟ったかのような顔をした。
「ああ、きみって恋愛が大好きなんだもんね。だから他人の恋愛話を聞くのも好きなのか。いいよ、教えてあげる。僕の愛する人はね――」
レヴィは白くて長い人差し指を壁に向ける。
「アラン・ベリンガム様だよ」
「……」
頭が真っ白になり、身体が石のように固まる。
（なんだって⁉　レヴィの好きな奴って俺？　待て待て……本当に俺なのか⁉）
心の中にはさまざまな言葉が浮かんでくるのに、それらが口から出ることはない。無言でフリーズしている俺を不審に思ったのか、レヴィが話しかけてくる。
「なあにその反応。せっかく教えてあげたのに」

「いやあの、だって俺……じゃなくて。その方ってもうお亡くなりになっているのですよね」
「そうだけど」
「亡くなった方に人生を捧げるつもりなのですか」
俺の言葉にレヴィは冷たく微笑んだ。
「そうだよ。亡くなった今もアラン様は僕の心の中でずっと生きている。そういうわけで、きみと夫夫らしい結婚生活を送ることは絶対にない。正直、さっさと死んで生まれ変わって、またアラン様を見つけたいぐらいなんだ。あ～早く死にた～い！」
肖像画を恍惚とした表情で見つめたままのレヴィを前に、俺は呆然とすることしかできなかった。
「ごめん。話の途中だったね」
ごめんと言いつつ俺のことなどどうでもよさそうに、レヴィは話を続ける。
「心配しないでほしいんだけど、この呪いのためにきみを一生縛り付けておくなんてことは考えてないから。僕、優しいでしょ」
「はあ」
「爵位を継いでからずっと、他人の力なんか借りずにこの呪いを解呪できる薬を作る実験をしているんだ。けっこういい線まできたから、あと数年で完成すると思う」
「すごいですね」
そういえば魔法薬草学は俺も好きだった。実験をしているとレヴィがいつも興味深そうに眺めていたことが急に思い出される。ちょっとおかしなところもあるが、弟子の成長は素直に嬉しい。

「まあね。自分で言うのもなんだけど、僕にできないことはないから。だからきみには薬が完成するまでの間、癒やしの力を貸してほしいんだ。完全に解呪できたら国に返してあげる。そのあとは再婚でもなんでもすればいいよ。離婚理由も、きみが怒られないようなものをちゃんと考えてあげるし、きみの家が納得するような額の財産もわけてあげるからさ。安心してよ」
「ありがとうございます」
正直、家に戻れると言われても、まったく嬉しくない。
（ああ、でも魔力を見せつければ、アイツらも黙るか。でもそれだけじゃ心許ない気もする。レヴィはああ言ってるけど、できるだけ頼りたくないし。ベリンガムにいる間に金を稼ぐ方法を考えないといけないな）
自分の未来に頭を巡らせていると、レヴィが言葉を続ける。
「僕は戦場に出向いていることが多いから、一緒にいる時間はそんなにないよ。だからきみも普段は好きに暮らしてね。欲しいものとか、やりたいことがあれば使用人たちに言って。僕に恋愛感情を持たず、干渉せず、迷惑をかけないこと――それさえ守ってくれれば、なんでもしてあげる。どう？　悪くない条件でしょ」
「ですね」
「ただし、離婚して国に戻ってもヴァンダービルトの秘密は誰にもしゃべっちゃダメ」
「え？」
穏やかだが冷たい声。視線を向けると、鮮やかな青が楽しそうにきらめいた。

「もし国に帰って誰かにこの秘密を話したら――君のこと、殺しちゃうから」
「なるほど、そうなりますよね」
「へえ、意外と肝が据わってるね。脅されても平気なんだ。じゃあそういうことで。契約成立だね。よろしく、ええと……なんだったっけ、きみの名前」
「……エリスです」
「そうそうエリス！　ごめんね。僕って興味のないこととか必要ないことって、全然覚えられなくって。また忘れても気を悪くしないでね」
てへ、という仕草でウインクをしてくる。超絶可愛らしいが、言っていることはまったく可愛くない。
（要は、俺には興味も関心もないから、名前を覚える気はないってことだろ）
昔はこんな子どもじゃなかった。もっと素直で優しい性格だったはずだ。いったいどこでこうなってしまったんだろう。うんうんとうなりながら首を傾げていると、再びレヴィの声が飛んできた。
「ねえ。いつまでいる気？　そろそろ帰ってほしいんだけど」
「は？」
「話は終わったし、用事も済んだでしょ。僕、明日にはまた戦場に戻るから少し休みたいんだよね。帰る時期がわかったらマークに連絡しとくから。じゃ」
レヴィはしっしっと追い払うような仕草をすると、立ち上がって部屋の奥へ歩いていく。
赤い扉を開けて別の部屋へ入ると、開け放された扉の向こうから声だけが聞こえた。

立ち読みサンプル
はここまで

「ベッドの近くに魔法陣があるでしょ？　上に乗ればきみの部屋に帰れるから。僕が着替えている間に帰ってほしいな」
「わかりました、帰ります」
聞こえるように少し大きな声で返事をすると、俺は魔法陣を踏み自室へと戻った。
部屋の中にはすでにリアムの姿はなく、薄暗い中、オレンジ色のベッドライトだけが優しく灯されている。
ベッド脇のサイドテーブルにリアムのメモが置いてあった。
『エリス様、お帰りなさいませ。お戻りになられる前に失礼します。ゆっくりお休みくださいね。リアム』
前世の記憶を思い出したとはいえ、リアムとは今世で生まれたときからの付き合いだ。
俺を心から思いやってくれているのが伝わってきて、心がホッとする。
「それに比べて、レヴィは……なんていうか、うん……すげえ変わったよな」
先ほどの様子を思い出しながら、着替えてベッドに潜り込む。
「情報量、多かったし。すげえ疲れた……それにしてもアイツ、いつからあんなに拗らせちまったんだろ」
軽くて暖かい上掛けに肌ざわりのいいシーツが眠気を誘い、俺は目を閉じた。
レヴィがずっと想っている人というのは前世の俺だった。しかも俺に一生を捧げると決めているらしい。